

## オオタバコガ

チョウ目ヤガ科に属し、日本、東アジア、インド、東南アジア、オーストラリア、アフリカに分布しています。元々、日本に生息し害虫として問題になる事はほとんどありませんでしたが、平成6年に西日本を中心に多くの作物で多発して以来、重要害虫となりました。加害作物は野菜ではナス、トマト、ピーマン、オクラ、スイカ、キュウリ、エンドウ、イチゴ、キャベツ、レタス、スイートコーン、アスパラガス等、花きではキク、バラ、トルコギキョウ、カーネーション、宿根かすみそう、ケイトウ等で極めて広食性です。

### 1. 形態

#### (1) 成虫

体長約14～18mm、翅開張は約35～40mmで、前翅が灰黄色～黄褐色まで変異があり、横線や紋はあまり鮮明ではなく、後翅の外縁部は黒、基半部は灰白色です。年3～4回程発生し、飛翔力が強いため長距離を移動できます。雌は夜間に葉裏や新芽、花蕾付近等に1粒ずつ、一晩で200～300粒、期間中に2000粒程産卵します。



#### (2) 幼虫

体長は羽化直後で約1mm、終齢では約30～40mmになり、体色は変異があり若齢期で黄白色～赤褐色、終齢では緑色～淡橙褐色になり、小さな黒い瘤から短い毛が生えています。

発育零点は13.2℃、気温25℃では20日で蛹になります。外観からタバコガの幼虫と区別が困難ですが、タバコガはナス科植物のみ加害します。



トマトに食入・加害

#### (3) 蛹

成熟した終齢幼虫は3～15cmの土中で蛹になります。従来、寒冷地では越冬しないと言われていましたが、9月に発生する幼虫は短日条件下で休眠蛹となり、無加温ハウス内において越冬が可能であるという報告(H25 青森県)もあります。

### 2. 被害

幼虫は新芽や茎葉の食害の他に植物体内に潜る習性が強いので、防除が難しくなります。花や蕾、豆類の莢、ハクサイ、レタス、キャベツの結球、スイートコーンの子実、トマト、ピーマン等の果実に食入・加害します。同じ部位を連続して摂食しないために、次々に移動、加害して成長するので、発生密度が低くても被害が大きくなる傾向があります。

### 3. 発生状況

病害虫防除室では、県下5か所にフェロモントラップを設置し、発生消長を調査しています。越冬世代成虫が5月に発生して以降、秋まで3～4回程発生し、世代を重ねるに従い生息密度が高まり、夏頃から被害が急増します。金沢市打木町では年平均800頭程フェロモントラップに誘殺され、平成27年は過去20年間で最も多く誘殺されました。(図1)

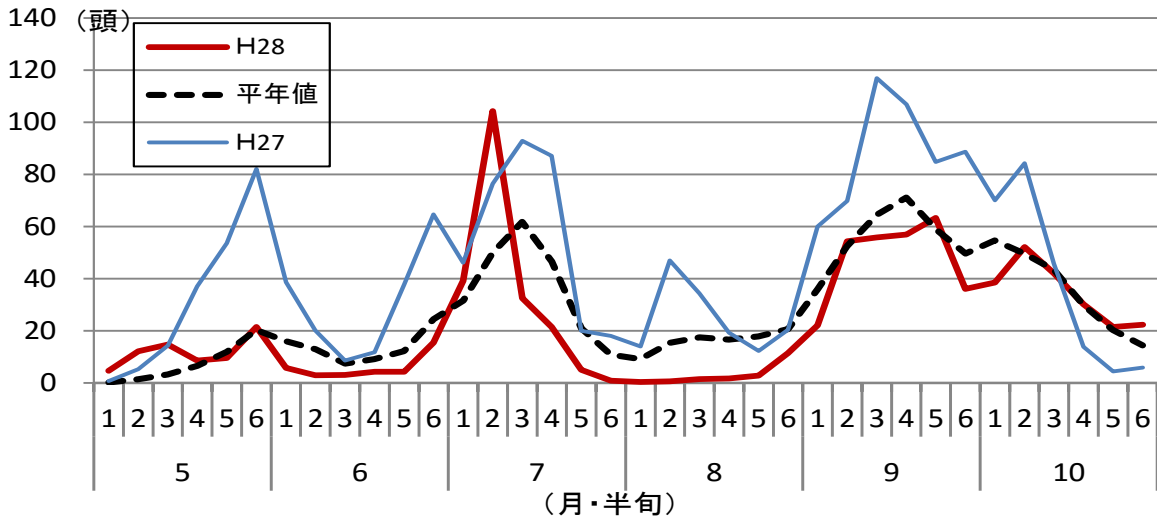


図1 期間中の誘殺消長 (金沢市打木町 フェロモントラップ)

### 4. 防除対策

#### (1) 薬剤散布 (同一系統の連用に留意)

オオタバコガは薬剤抵抗性が発達し、成長と共に薬剤による防除効果が低下するので、効果の高い薬剤を若齢期に散布することが重要です。(図2)

例：アフーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤、トルネードエースDF、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5、カスケード乳剤、コテツフロアブル、エスマルクDF等

#### (2) ハウスの開口部に防虫ネット (目合：4mm) を張り、成虫の侵入を予防します。

補正死虫率(%)

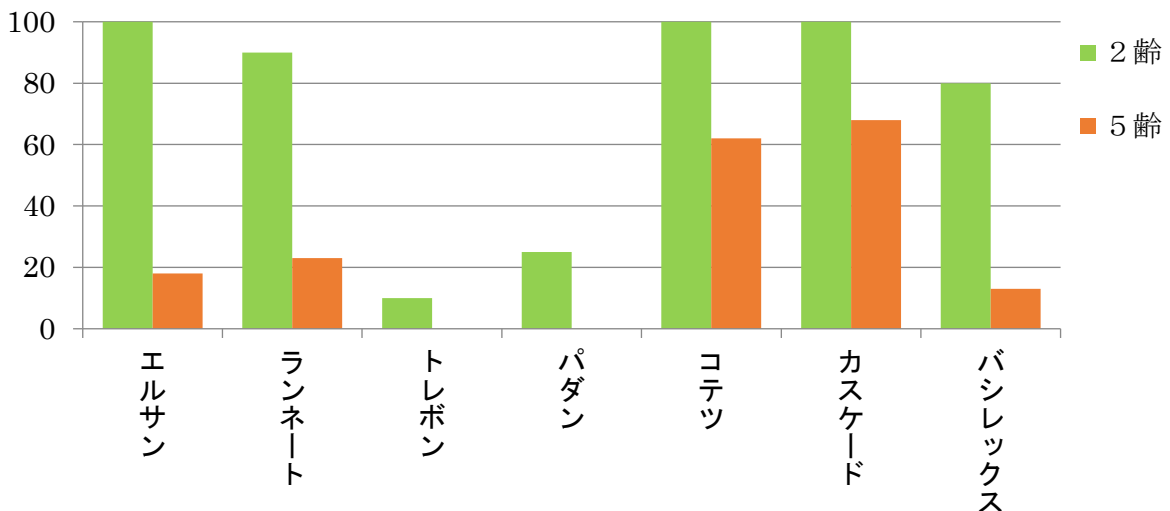


図2 オオタバコガの薬剤効果試験 (H8 石川県)